

富岡先生

国木田独歩

青空文庫

何公こうしゃく爵やくの旧領地とばかり、詳細くわしい事は言われない、侯伯子男の新華族を沢山出しただけに、同じく維新の風雲に会しながらも妙な機はずみから雲梯うんでいをすべり落ちて、遂ついには男爵どころか県知事の椅子ひとつ一にも有ありつき得ず、空むなしく故郷こきょうに引込んで老朽ちんとする人物も少くはない、こういう人物に限りつて変物かわりものである、頑固がんこである、片意地である、尊大である、富岡先生もその一人たるを失なわれない。

富岡先生、と言えはその界限かいわいで知らぬ者のないばかりでなく、恐らく東京に住む侯伯子男の方々の中にも、「ウン彼奴やつか」と直ぐ御承知の、そして眉まゆをひそめらるる者も随分あるらしい程ほどの知名な老人である。

さて然しからば先生は故郷こきょうで何を為していたかというに、親族が世話するといふのも拒こぼんで、広い田の中の一軒屋の、五間いつまばかりあるを、何々塾じゆくと名なづけ、近郷きんじよの青年七八名を集めて、漢学の教授をしていた、一人の末子ぼつしを対手あいてに一人の老僕に家事を任かして。

この一人の末子は梅子という未まだ六七むつななつの頃から珍らしい容貌きりようよ佳しで、年頃になれ

ば非常の美人になるだろうと衆人から噂されていた娘であるが、果してその通りで、年の行く毎に益々美しく成る、十七の春も空しく過ぎて十八の夏の末、東京ならば学校の新学期の初まるも遠くはないという時分のこと、法学士 大津定二郎がおおつていじろつが帰省した。

富岡先生の何々塾から出て（無論小学校に通いながら漢学を学び）遂に大学まで卒業した者がその頃三名ある、この三人とも梅子嬢は乃公の者と自分で決めていたらしいことは略世間でも嗅ぎつけていた事実で、これには誰も異議がなく、但し三人の中何人が遂に梅子嬢を連れて東京に帰り得るか、他所ながら指を啣えて見物している青年も少くはなかつた。

法学士大津定二郎が帰省した。彼は三人の一人である。何峠から以西、何川辺までの、何町、何村、字何の何という処々の家の、種々の雑談に一つ新しい興味ある問題が加わつた。愈々大津の息子はお梅さんを貰いに帰つたのだろう、甘く行けば後の高山の文さんと長谷川の息子が失望するだろう、何に田舎でこそお梅さんは美人じゃが東京に行けばあの位の女は沢山にありますから後の二人だつてお梅さんばかり狙うてもおらんよ、など厄鬼になりて討論する婦人連もあつた。

或日の夕暮、一人の若い品の佳い洋服の紳士が富岡先生の家の前えに停止まつて、頻り

と内の様子を窺^{うかが}ってはもじもじしていたが遂に門を入^{はい}つて玄關先に突立^{つた}つて、

「お頼みます」という声さえ少し顫^{ふる}えていたらしい。

「誰か来たぞ！」と怒鳴^{たしか}つたのは確に先生の声である。

襖^{ふすま}が静に開いて現われたのが梅子である。紳士の顔も梅子の顔も一時にさつと紅^{こう}をさした。梅子はわずかに会釈して内に入った。

「何だ、大津の定さんが来た？、ずんずんお上りんさいと言え！」先生の太い声がありありと聞えた。

大津は梅子の案内で久しぶりに富岡先生の居間、即ち彼がその昔漢学^{かみ}の素読^{そとく}を授^へつた室に通^とつた。無論大学に居た時分、一夏帰省した時も訪^とうた事はある。

老漢学者と新法学士との談話^{はなし}の模様は大概次の如くであった。

「ヤア大津、帰省^{かえ}つたか」

「ともかく法学士に成りました」

「それが何だ、エ？」

「内務省に出る事に決定^{きま}りました、江藤さんのお世話で」

「フンそうか、それで目出度^{めでた}いというのか。然し江藤さんとは全体誰の事じゃ」

「江藤侯のことで……直文ちよくぶんさんのことで」

「ウーン三輔さんすけのことか、そうか、三輔なら三輔と早く言えば可ええに。時に三輔は達者か
ナ」

「相変らず元気で御座います」

「フンそうか、それは結構じや、狂之助は？」

「御丈夫のようで御座います」

「そうか、今度逢あつたら乃公わしが宜よく言つたと言つとくれ！」

「承知致しました」

「ちつと手紙でもよこせと言え。エ、侯爵こうしやくづら面して古い士族を忘れんと言え。全体彼あ奴等いつに頭を下げぺこぺこと頼み廻るなんちゆうことは富岡の塾なよごの名汚しだぞ。乃公わしに言え
ば乃公から彼奴等あいつらに一本手紙をつけてやるのに。彼奴等あいつらは乃公の言うことなら聴きかん理由わけ
にいかん」

先ずこんな調子。それで富岡先生は平気な顔して御座る。大津は間もなく辞して玄關に出ると、梅子が送つて来た。大津は梅子の顔を横目で見て、「またその内」とばかり、すたこらと門を出て吻ほっと息を吐いた。

「だめだ！　まだあの高慢狂きちがい気が治なおらない。梅子さんこそ可い面の皮つらだ、フン人を馬鹿にしておる」と薄暗い田たん甫ぼ道みちを辿たどりながら眩つふやいたが胸の中は余り穩おだやかでなかつた。

五六日経たつと大津定二郎は黒田の娘と結婚の約が成つたという噂が立つた。これを聞いた者の多くは首を傾けて意外という顔かおつき色をした。然し事実全くそうで、黒田という地主の娘玉子嬢、容貌きりようは梅子と比べると余程落ちるが、県の女学校を卒業してちようど帰郷かえつたばかりのところを、友人某なにがしの奔走で遂に大津と結婚することに決定きまつたのである。妙なものでこう決定きまつると、サアこれからは長谷川と高山の競争だ、お梅さんは何方どっちの物になるだろうと、大声で喋舌しゃべる馬うま面まの若い連中も出て来た。

ところで大津法学士は何でも至急に結婚して帰京の途中を新婚旅行ということにしたいと申出たので大津家は無論黒田家の騒動さわぎは尋常ひととおりでない。この両家とも田舎では上流社会に位いするので、祝儀しゅうぎの礼が引きもきらない。村落に取っては都会に於おける岩崎三井の祝いわいごと事ことどころではない、大変な騒ぎである。両家は必死になつて婚儀の準備に忙殺まじされてゐる。

その愈々いよいよ婚礼の晩という日の午後三時頃でもあろうか。村の小川、海に流れ出る最近まぢかの川柳しげ繁しげれる小陰に釣たる二人の人がある。その一人は富岡先生、その一人は村の校長

細川繁、これも富岡先生の塾に通うたことのある、二十七歳の成年男子である。

二人は間を二三間隔てて糸を垂れている、夏の末、秋の初の西に傾いた鮮やかな日景は遠村近郊小丘樹林を隈なく照らしている、二人の背はこの夕陽をあびてその傾いた麦藁帽子とその白い湯衣地とを真ともに照りつけられている。

二人とも余り多く話さないで何となく物思に沈んでいたようであつたが、突然校長の細川は富岡老人の方を振り向いて

「先生は今夜大津の婚礼に招かれましたか」

「ウン招ばれたが乃公は行かん！」と例の太い声で先生は答えた。実は招かれていないのである。大津は何と思つたかその旧師を招かなかつた。

「貴様はどうじゃ？」

「大津の方からこの頃は私を相手にせんようですから別に招もしません」

「招んだつて行くな。あんな軽薄な奴のところに誰が行く馬鹿があるか。あんな奴にやア黒田の娘でも惜い位だ！あれから見ると同じ大学を出ても高山や長谷川は人間が一等上だのう、その中でも高山は余程見込がある男だぞ」

細川繁は黙つて何にも言わなかつた、ただ水面を凝視めている。富岡老人も黙つて了つ

た。

暫くすると川向の堤の上を二三人話しながら通るものがある、川柳の蔭で姿は見えぬが、帽子と洋傘とが折り折り木間から隠見する。そして声音で明らかに一人は大津定二郎一人は友人某、一人は黒田の番頭ということが解る。富岡老人も細川繁も思わず聞耳を立てた。三人は大声で笑い興じながらちようど二人の対岸まで来た二人の此処に蹲居んでいることは無論気がつかない。

「だって貴様は富岡のお梅嬢に大変熱心だったと言いますぜ」これは黒田の番頭の声である。

「嘘サ、大嘘サ、お梅さんは善いにしてもあの頑固爺の婿になるのは全く御免だからなア！ ハツハツ……お梅さんこそ可憐そうなものだ、あの高慢狂気のお蔭で世に出ることが出来ない！」これは明らかに大津法学士の声である。

三人は一度に「ハツハツハツ……」と笑った。富岡老人釣竿を投出してぬつくと起上がった。屹度三人の方を白眼で「大馬鹿者！」と大声に喝した。この物凄い声が川面に鳴り響いた。

対岸の三人は喫驚したらしく、それと又気がついたかして忽ち声を潜め大急ぎで通り

過ぎて了つた。

富岡老人はそのまま三人の者の足音の聞こえなくなるまで対岸を白眼でいたが、次第に眼を遠くの禿山に転じた、姫小松の生えた丘は静に日光を浴びている、その鮮やかな光の中にも自然の風物は何処ともなく秋の寂寥を帯びて人の哀情をそそるような気味がある。背の高い骨格の逞ましい老人は凝然と眺めて、折り折り眼をしばだたいてたが、何時しか先きの氣勢にも似ずさも力なさそうに細川繁を振向いて

「オイ貴公この道具を宅まで運こんでおくれ、乃公は帰るから」

言い捨てて去つて了つた。校長の細川は取残されてみると面白くはないが、それでも糸を垂れていた、実は頻りと考え込んでいたのである。暫時するとこれも力なげに糸を巻き籠を水から上げて先生の道具と一緒に肩にかけ、程遠からぬ富岡の宅まで行つた。庭先

「老先生どうかしたのか喃」と老僕倉蔵が声を潜めて問うた。

「イヤどうもなさらん」

「でも様子が少し違うから私又どうかなされたかと思つて」

「先生今何をしておいでる？」

「寝ていなさるが枕頭まくらもとに嬢様呼んで何か細い声こまかで話をしておいでるようで……」
 「そうか」

「まア上つて晩まで遊んでおいでなされませえの」

「晩にでも来る！」

細川は自分の竿を担かついで籠びくをぶらぶら下げ、浮かぬ顔をして、我家へと歸つた。この時が四時過ぎでもあろう。家では老母が糸を紡ひいていた。

その夜の八時頃、ちょうど富岡老人の平時いづも晩酌が済む時分に細川校長は先生を訪とうた。

田甫道たんぼみちをちらちらする提燈ちようちんの数が多いのは大津法学士の婚礼があるからで、校長も

その席に招かれた一人二人に途みちで逢あつた。逢う度たびごと毎に皆な知る人であるから二言三言の挨拶いさつはしたが、可い心持はしなかつた。

富岡の門まで行つてみると門は閉しまつて、内は寂然ひっそりとしていた。校長は不審に思ったが門を叩たたく程の用事もないから、其処そこらを、物思に沈みながらぶらぶらしていると間もなく老僕倉蔵が田甫道を大急ぎで遣やって来た。

「オイ倉蔵、先生は最早もうお寝やすみになつたのかね？」

「オヤ！ 細川先生、老先生は今東京へお出たち発になりました！」と呼吸いきをはずまして老僕

は細川の前へ突立った。

「東京へ」細川は声も喉のどに塞つまつたらしい。

「ハア東京へ！」

「マアどうしたのだろう！ お梅さんは？」

「御一緒に」

「マアどうしたのだろう！」校長は喫驚びつくりすると共に、何とも言い難き苦惱が胸をあつ圧して来た。心も空に、気が気ではない。倉蔵は門を開けながら

「マアお入りなされの」

校長は後について門を入り縁先に腰をかけたが、それも殆ど夢中であつたらしい。

「マア先生は何にも知らないのかね？」

「乃公わしが何を知るものか、今日釣に行つていたが老先生は何にも言わんからの」

「そうかの？」と倉蔵は不審な顔色かおつきをして煙草を吸い初めた。

「貴公理由おまえわけを知らんかね？」

「私わした唯だ倉蔵これを急いで村長の処とこへ持て行けと命いいつか令りましたからその手紙を村長さん処とこへ持て行つて帰宅かえつしてみると最早仕度もうしたくが出来ていて、私直ぐ停車場まで送つて今帰つた処とこ

じやがの、何知るもんかヨ」

「フーン」と校長考えていたが「何日頃帰国ると言われた？」

「老先生は十日ばかりしたら帰る、それも能くは解らんちゆうて……」

「そうか……」と校長は嘆息をしてしたが、

「また来る」と細川は突然富岡を出て、その足で直ぐ村長を訪うた。村長は四十何歳という分別盛りの男で村には非常な信用があり財産もあり、校長は何時もこの人を相談相手にしているのである。

「貴公富岡先生が東京へ行つた事を知っているか」と校長細川は坐に着くや着かぬに問いかけた。

「知つているとも、先刻倉蔵が先生の手紙を持って来たが、不在中家の事を托むと書いてあった」と村長は夜具から頭ばかり出して話している。大津の婚礼に招ねかれたが風邪をひいて出ることが出来ず、寝ていたのである。

「どういう理由で急に上京したのだろう？」

「そんな理由は手紙に書いてなかつたが、大概想像が着くじやアないか」と村長は微笑を帯びて細川の顔をじろじろ見ながら言った。彼は細川が梅子に人知れず思を焦がしている

ことを観破みぬいていたのである。

「私わしには解げせんなア」と校長は嘆息ためいきを吐ついた。

「解げせるじゃアないか、大津が黒田のお玉さんと結婚しただろう、富岡先生少し当あてが外はずれたのサ、其処そこで宜よろしい此処こゝちにもその積つもりがあるとお梅嬢さんを連れて東京へ行つて江藤侯いしのしや井下伯たを押廻おわしてオイ井下、娘を頼たのむ位なことだろうヨ」

「そうかしらん？」

「そうとも！ それに先生は平常ふだんから高山々と讚ほめちぎっていたから多分井下伯に言つてお梅嬢さんを高山に押付ける積りだろう、可いいサ高山もお梅嬢さんなら兼ねらつて狙ねらっていたのだから」

「そうかしらん？」と細川の声は慄ふるえている。

「そうとも！ それで大津の鼻をあかしてやろうと言うんだらう、可いいサ、先生も最早もうあれで余程よほど老衰よわて御坐まるから早くお梅嬢さんのことを決定きめたら肩が安まって安心して死ぬるだらうから」

村長は理の当然を平気で語つた。一つには細川に早く思いあきらめさしたい積りで。

「全くそうだ、先生も如彼あ見えても長くはあるまい！」と力なきそうに言つて校長は間もなく村長の宅うちを辞した。

憐むべし細川繁！ 彼は全く失望して了つて。その失望の中には一いつの苦惱が雜まじつておる。彼は「我もし学士ならば」という一念を去ることが出来ない。幼時は小学校に於おいて大津も高山も長谷川も凌しのいでいた、富岡の塾でも一番出来が可よかつた、先生は常に自分を最も愛して御坐つた、然るに自分は家計の都合で中学校にも入いる事が出来ず、遂に官費で事が足りる師範学校に入つて卒業して小学教員となつた。天分に於ては決して彼等二に三さん子には、劣らないが今では富岡先生すら何とかか何とか言つても矢張り自分よりか大津や高山を非常に優まさつた者のように思つてお梅嬢さんに熨斗のしを附けようとする！ 残念なことだと彼は恋の失望の外の言い難き恨を呑のまなければならぬこととなつた。

然し彼は資性篤実で又能く物に堪たえ得る人物であつたから、この苦惱の爲めに校長の職務とめを怠いとるようなことは為しない。平常いつものように平氣の顔で五六人の教師の上に立ち數百すの児童を導とびいていたが、暗愁の影は何処どことなく彼に伴うている。

二

富岡先生が突然上京してから一週間目のことであつた、先生は梅子を伴うて帰国かえつて来

た。校長細川は「今帰国つたから今夜遊びに来い」との老先生の手紙を読んだ時には思わず四辺を見廻わした。

自分勝手な空想を描きながら急いで往つてみると、村長は最早座に居て酒が初まつていた。梅子は例の如く笑味を含んで老父の酌をしている。

「ヤ細川！ 突如に出発ので驚いたろう、何急に東京を娘に見せたくなつてのう。十日ばかりも居る積じやつたが癩に触れることばかりだつたから三日居て出立て了つた。今も話しているところじゃが東京に居る故国の者は皆なだめだぞ、碌な奴は一匹も居らんぞ！」

校長は全然何のことだか、煙に捲かれて了つて言うべき言葉が出ない、ただ富岡先生と村長の顔を見比べているばかりである。村長は怪しげな微笑を口元に浮べている。

「エえまア聞いてくれこうだ、乃公は娘を連れて井下間吉の所へも江藤三輔の所へも行った、エえ、故国からわざわざ乃公が久しぶりに娘まで連れて行ったのだから何とか物の言い方も有ろうじゃア、それを何だ！ 侯爵顔や伯爵顔を遠慮なくさらけ出してその慢無礼な風たら無かつた。乃公もグイと癩に触つたから半時も居らんですん宿へ帰つてやつた」と一杯一呼吸に飲み干して校長に差し、

「それも彼奴等の癖だからまア可えわ、辛棒出来んのは高山や長谷川の奴らの様子だ、オ

イ細川、彼等全然でだめだぞ、大津と同じことだぞ、生意気で猪小才で高慢な顔をして、小官吏になればあも増長されるものかと乃公も愛憎が尽きて了うた。業が煮えて堪らんから乃公は直ぐ帰国ろうと支度を為しているとちようど高山がやつて来て驚いた顔をしてこう言うのだ、折角連れて来たのだから娘だけは井下伯にでも托けたらどうだろう、井下伯もせめて娘だけでも世話をしてやらんと富岡が可憐そうだと云つて、大變乃公を気の毒がついていたとこう言うじやアないか、乃公は直然彼奴の頭をほかり一本参つてやつた、何だ貴様まで乃公を可憐そうだとか何とか思っているのか、そんな積りで娘を托けると言うのか、大馬鹿者！ と怒鳴つけてくれた」

「そして高山はどうしました」と校長は僅かに一語を発した。

「どうするものか真赤な顔をして逃げて去つて了うた、それから直ぐ東京を出発して何処へも寄らんでずんずん帰つて来た」

「それは無益ませんでしたね、折角おいでになつて」と校長はおずおずしながら言つた。

先生の気焔は益々昂まつて、例の昔日譚が出て、今の侯伯子男を片端から罵倒し初めたが、村長は折を見て辞し去つた。校長は先生が喋舌り疲ぶれ酔い倒れるまで辛棒して氣の的となつていた。帰える時梅子は玄關まで送つて出たが校長何となくについ

ていた。田甫道に出るや、彼はこの数日の重荷が急に軽くなつたかのように、いそいそと路を歩いたが、我家に着くまで殆ど路をどう来たのか解らなんだ。

三

その翌々日の事であつた、東京なる高山法学士から一通の書状が村長の許に届いた。その文意は次の如くである。

富岡先生が折角上京されたと思つたと突然帰国された、それに就て自分は大に胸を痛めている、先生は相変らず偏執ておられる。我々は勿論先輩諸氏も決して先生を冷遇するのではないが先生の方で勝手にそう決定て怒つておられる、実に困つた者で手の着けようがない。実は自分は梅子嬢を貰いたいと兼ねて思つていたのであるから、井下伯に頼んで梅子嬢だけ滞めて置いて後から交渉して貰う積りでいた、然るに先生の突然の帰国でその計画も画餅になつたが残念でならぬ。自分は容貌の上のみで梅子嬢を思つていたのでない、御存知の通り実に近頃の若い女子には稀に見るところの美しい性質を以ておられる、自分は随分東京で種々の令嬢方を見たが梅子嬢ほどの癖のない、すらりとした、すなおなる女

を見たことはない。女子の特質とも言うべき柔和な穏やかな何処までも優しいところを梅子嬢は十二分に有ておられる。これには貴所も御同感と信ずる。もし梅子嬢の欠点を言えば剛という分子が少ない事であろう、しかし完全無欠の人間を求めるのは求める方が愚である、女子としては梅子嬢の如き寧ろ完全に近いと言って宜しい、或は剛の分子の少ないところが却て梅子嬢の品性に一段の奥ゆかしさを加えておるのかとも自分は思う。自分は決して浮きたる心でなく真面目にこの少女を敬慕しておる、何卒か貴所も自分のため一臂の力を借して、老先生の方を甘く説いて貰いたい、あの老人程舵の取り難い人はないから貴所が其所を巧にやってくれるなら此方は又井下伯に頼んで十分の手順をする、何卒か宜しく御頼みます。

但し富岡老人に話されるには余程よき機会を見て貰いたい、無暗に急ぐと却て失敗する、この辺は貴所に於て決して遺漏はないと信ずるが、元来老先生といえども人並の性情を有つておるから了解することは能く了解する人である。ただその資質に一点我慢強いところのある上に、維新の際妙な行きがかりから脇道へそれて遂に成るべき功名をも成し得ず、同輩は侯伯たり後進は子男たり、自分は田舎の老先生たるを見、かつ思う毎にその性情は益々荒れて来て、それが慣性となり遂には煮ても焼いても食えぬ人物となつたのである、

であるから老先生の心底には常に二個の人が相戦つておる、その一人は本来自然の富岡氏、その一人はその経歴が造つた富岡先生。そして富岡先生は常に猛烈に常に富岡氏を屈服するに慣れていて、その結果として富岡氏が希望し承認し或は飛びつきたい程に望んでいることでも、あの執拗れた焦熬している富岡先生の御機嫌に少しでも触ろうものなら直ぐ一撃のもとに破壊されて了う。この辺のところは御存知でもあろうが能く御注意あつて、十分機会を見定めて話して貰いたい。

という意味を長々と熱心に書いてある。村長は委細を呑込んで、何卒機会を見て甘くこの縁談を纏めたいものだと思つた。

三日ばかり経つて夜分村長は富岡老人を訪うた。機会を見に行つたのである。然るに座に校長細川あり、酒が出ていて老先生の気焰頗る凄まじかつたので長居を為さずに帰つて了つた。

その後五日経つて、村長は午後二時頃富岡老人を訪う積りでその門まで来た。そうすると先生の声で

「馬鹿者！ 貴様まで大馬鹿になつたか？ 何が可笑しいのだ、大馬鹿者！」

と例の大声で罵るのが手に取るように聞えた。村長は驚いて誰が叱咤られるのかとその

まま足を停めて聞耳を聳てしていると、内から老僕倉蔵がそつと出て来た。

「オイ倉蔵、誰だな今怒鳴られているのは？」村長は私語いた。倉蔵は手を以てこれを止めて、村長の耳の傍に口をつけて、

「お嬢様が叱咤られているのだ」

「エツお梅嬢が」と村長は眼を開瞳つた。その筈で、梅子は殆ど富岡老人に従来一言たりとも叱咤れたことはない。梅子に対してはさすがの老先生も全然子供のように、その父子の間の如何にも平穩にして情愛こまかなるを見る時は富岡先生実に別人のようだと誰しも思っていた位。

「マアどうして？」村長は驚ろいて訊ねた。

「どうしてか知らんが今度東京から帰つて来てからというものは、毎日酒ばかり呑んでいて、今まで御嬢様にはあんなに優しかった老先生がこの二三日はちよつとしたことにも大きな声をして怒鳴るようにならしゃつただ、私も手の着けようがないので困っていたことで御座りますよ」さも情なそうに言つて、

「あの様子では最早先が永くは有りますめえ、不吉なことを言うようじゃが……」と倉蔵は眼を瞬たいた。この時老先生の声で

「倉蔵！ 倉蔵！」と呼ぶ声が座敷の縁先でした。倉蔵は言葉を早めて、益々小さな声で「然し晩になると大概校長さんが来ますからその時だけは幾干か気嫌が宜えだが校長さんも感心に如何なんと言われても逆からわらないで温和うしているもんだから何時か老先生も少しは機嫌が可くなるだ……」

「倉蔵！ 倉蔵は居らんか！」と又も老先生の太い声が響いた。

倉蔵は目礼したまま大急ぎで庭の方へ廻わった。村長は腕を組んで暫時く考えていたが歎息をして、自分の家の方へ引返した。

四

村長は高山の依頼を言い出す機会の無いのに引きかえて校長細川繁は殆ど毎夜の如く富岡先生を訪うて十時過ぎ頃まで談話している、談話をすると言うよりか寧ろその愚痴やら悪口やら気焰やら自慢嘯やらの的になつている。先生はこの頃になつて酒を被ること益々甚だしく倉蔵の言つた通りその言語が益々荒ら荒らしくその機嫌が愈々難かしくなつて来た。殊に変わったのは梅子に対する挙動で、時によると「馬鹿者！ 死んで了え、

貴様きさまの在あるお蔭かげで乃公のおれは死ぬことも出来きわんわ!」とまで怒鳴おこることがある。然しかし梅子うめこは能よくこれに堪たえて愈々ますます従順すなおに介抱すなわしていた。其処そこで倉蔵くらぞうが

「お嬢様お嬢さん、マア貴嬢あんなのような人は御座ごわりませんで、神様かみさまのような人とは貴嬢あんなのことで御座ござりますので、感心かんしんだなア……」と老の眼まなこに涙なみだをぼろぼろこぼすことがある。

こんな風かぜで何時いつしか秋あきの半なかとなつた。細川ほそがわ繁しげは風邪かぜを引ひいていたので四五日よひ先生せんせいを訪まうことが出来きなかつたが熱あつも去いつたので或夜あるよる七時頃しちじごろから出でかけて行いた。

家内やうちが珍めづらしくも寂ひっそり然ぜんぜんとしていたので細川ほそがわは少し不審ふしんに思おもいつつ坐敷ざしきに通とほると、先生せんせいの居間いまの次ぎの間に梅子うめこが一人裁縫ざいほうをしていた。細川ほそがわが入いつて来きても頭かしらを上げないので、愈々いよいよ訝いぶかしく能よく見みると蒼あおさめた頬ほおに涙なみだが流ながれているのが洋燈ランプの光ひかりにありありと解わかる。校長びやくは喫驚びっくりりして

「お梅さんどうかしたのですか」と驚惶あわただしく訊たずねた。梅子うめこは猶なおも頭かしらを垂たれたまま運たばす針みづめを凝視みつめて黙もくっている。この時次ときぎの室むろで

「誰たれだ?」と老先生おきなが怒鳴おこつた。

「私わたくしで御座ございます。細川ほそがわで御座ございます」

「此方こつちへ入いらんで何なにをしているのか、用もちがあるからちよつと来きい!」

「唯今」と校長が起とうとした時、梅子は急に細川の顔を見上げた、そして涙がはらはらとその膝にこぼれた。ハツと思つて細川は躊躇うたが、一言も発し得ない、止まることも出来ないでそのまま先生の居間に入った。何とも知れない一種の戦慄が身うちに漲ぎつて、坐つた時には彼の顔は真蒼になつていた。富岡老人は床に就いていてその枕許に薬罈が置いてある。

「オヤ何所かお悪う御座いますか」と細川は搾り出すような声で漸と言つた。富岡老人一言も発しない、一間は寂としている、細川は呼吸も塞るべく感じた。暫くすると、

「細川！ 貴公は乃公の所へ元来何をしに来るのだ、エ？」

寝たまま富岡先生は人を押しつけるような調声、人を嘲けるような声音で言つた。細川は一語も発し得ない。

「エ、元来何をしに来るのだ？ 乃公の見舞に来るのか。娘の御機嫌を取りに来るのか、エ？ 返事をせえ！」

校長は眼を閉り歯を喰しぼつたまま頭を垂れ両の拳を膝に乗せている。

「貴公は娘を狙つておるナ！ 乃公の娘を自分の物にしたいと狙つておるナ！ ふん」
細川の拳は震えている。

「貴公よく考えてみる！ 貴公は高が田舎の小学校の校長じゃアないか。同じ乃公の塾に居た者でも高山や長谷川は学士だ、それにさえ乃公は娘を与んのだぞ。身の程を知れ！ 馬鹿者！」

校長の顔は見る見る紅をさして来た。その握りしめた拳の上に熱涙がはらはらと落ちた。侯爵伯爵を罵る口から能くもそんな言葉が出る、矢張人物よりも人爵の方が先生には難有いのだろう、見下げ果てた方だと口を衝いて出ようとする一語を彼はじつと忪えている。この先生の言としては怪むに足らない、もし理窟を言つて対抗する積りなら初めからこの家に入らないのである。と彼は思い返した。

「エ、それともどうしても娘が欲しいと言うのか、コラ！」

校長は一語を発しない。

「判然と言え！ どうしても欲しいと言うのか、男らしく言え、コラ！」

細川はきつと頭をあげた。

「左様で御座います！ 梅子さんを私の同伴者に貰いたいと常に願っております！」きつぱりと言いつつて老先生の眼晴を正視した。

「もし乃公が与らぬと言つたらどうする？」

「致し方が御座いません！」

「帰れ！ 招喚よびにやるまでは来るな、帰れ！」と老人は言放つて寝返ねがえりして反対むこうを向いて了つた。

細川は直ちに起つて室へやを出ると、突伏して泣いていた梅子は急に起て玄関まで送つて来て、

「貴下あなた何卒父どうかの言葉に氣になさらないで……御存知の通りな氣性で御座いますから！」とおろおろ声で言つた。

「イイエ決して氣には留めません、何卒先生どうかを御大切ごたいせつに、貴嬢あなたも御大事ごだいじ……」終まで言みなう能あたわず、急いで門を出て了つた。

その夜細川が自宅うちに歸つたのは十二時過ぎであつた。何処どこを徘徊うろつしていたのか、真蒼まっさおな顔色をしてさも困憊がっかりしている様子を寝ないで待つていた母親は不審そうに見ていたが、「お前又た風邪を引きかえしたのじゃアないかの、未だ十分でないのに余り遅くまで夜あるきをするのは可くないよ」

「何に格別の事は御座いません」と細川は何気なく言つてそのま自分の居間へ入つた。母親はその後姿を見送つてそつと歎息ためいきをした。

五

その翌日より校長細川は出勤して平常の如く職務を執っていたが彼の胸中には生れ落ちて以来未だ経験したことのない、苦惱が燃えているのである。

もし富岡先生に罵のしられたばかりなら彼は何とかして思切るほうに悶もがいたであろう、その煩悶はんもんも苦痛には相違ないが、これ戦たたかいである、彼の意力は克よくこの悩に堪たえたであろう。然しかし今の彼の苦惱は自ら解みずか解く事の出来ない惑まどいである、「何故梅子はあの晩泣いていたろう。自分が先生に呼ばれてその居間に入る時、梅子は何故あんな相貌かおつきをして涙を流して自分を見たらう。自分が先生に向むかつて自分の希望のぞみを明言した時に梅子は隣室で聞いていたに違いない、もし自分の希望のぞみを全く否いなむ心なら自分が帰る時あんなに自分を慰める筈はずはない……」

「梅子は自分を愛している、少くとも自分が梅子を恋こっていることを不快には思っていない」との一念が執しゅう念ねくも細川の心に盤居わだかまっついていて彼はどうしてもこれを否いなむことが出来ない、然し梅子が平常何人ふだんなんびとに向ても平等に優しく何人に向ても特種の情態こころもちを示したこと

のないだけ、細川は十分この一念を信ずることが出来ぬ。梅子が泣いて見あげた眼の訴うるが如く謝るが如かりしを想起す毎に細川はうつとりと夢見心地になり狂わしきまでに恋しさの情燃えたつのである。恋、惑、そして恥辱、夢にも現にもこの苦惱は彼より離れない。

或時は断然倉蔵に頼んで窺かに文を送り、我情のままを梅子に打明けんかとも思い、夜の二時頃まで眠らないで筆を走らしたことがある、然し彼は思返してその手紙を破つて了つた。こういう風で十日ばかり経つた。或日細川は学校を終えて四時頃、丘の麓を例の如く物思に沈みつつ帰つて来ると、倉蔵に出遇つた。倉蔵は手に薬罌を持っていた。

「先生！ どうしてこの頃は全然お見えになりませんか？」倉蔵はないない様子を知りながら素知らぬ風で問うた。

「老先生の御病気はどうかね？」と校長も又た倉蔵の間に答えないで富岡老人の様子を訊ねた。

「この頃はめつきりお弱りになつて始終床にばかり就ていらつしやるが、別に此処というて悪るい風にも見えねえだ。然し最早長くは有りますめえよ！」と倉蔵は歎息をした。「ふうん、そうかな、一度見舞に行きたいのだけれど……」と校長の声も様子も沈んで了

つた。

「お出いでなされませ、関かまうもんかね、疝かん癩しゃくまぎれに何言うたて……」

「それもそうだが……お梅さんの様子はどうかね？」と思切つて問うた。

「何だかこの頃は始終鬱屈ふささいばかり御座るが、見ても可哀そうでなんねえ、ほんとに嬢さんは可哀そうだ……」と涙にもろい倉蔵は傍わきを向いて田甫たんぼの方を眺ながめ最早眼もうをしばだたいている。

「困つたものだナ、先生は相変らず喧やかましく言うかね？」

「ナニこの頃は老先生も何だか床の中で半分眠つてばかり居て余り口を用きかねえだ」

「妙だねえ」と細川は首をかしげた。

「これまで煩わづらつたことが有あつても今度のように元氣のないことは無ねえが、矢張やっぱり長くない証しるしであるらしい」

「そうかも知れん！」と細川は眉まゆを顰ひそめた。

「それに何だか我が折れて愚かえに還つたような風も見えるだ。それを見ると私も気の毒でならん、喧やかまし人は矢張喧やっぱりしゅうしていてくれる方が可ええと思いなされ」

「今夜見舞に行つてみようかしらん」

「是非来なさるが可え、関うもんか！」

「うん……」と細川は暫時しばらく考えていたが、「お梅さんに宜しく言っておくれ」

「かしこまりました、是非今夜来なさるが可え」

細川は軽く点頭うなずき、二人は分れた。いろいろと考え、種々いろいろに悶もがいてみたが校長は遂にその夜富岡を訪問とくことが出来なかつた。

それから三日目の夕暮、倉蔵が真面目まじめな顔をして校長の宅うちへ来て、梅子からの手紙を細川の手に渡した、細川が喫驚びつくりして目を円まるくして倉蔵の顔を見ているうちに彼は挨拶あいさつも為しないで帰しまつて了しまつた。

梅子からの手紙！ 細川繁の手は慄ふるえた。無理もない、曾かつて例のないこと、又有り得うべからざること、細川に限らず、梅子を知れる青年わかものの何人も想像することの出来ないことである！

封を切て読み下すと、頗すこぶる短い文ふみで、ただ父に代つてこの手紙を書く。今夜直ぐ来て貰もらいたい是非とのことである、何か父から急にお話わしたいことがあるそうだとの意味。

細川は直ぐ飛んで往いつた。「呼びにやるまで来るな！」との老先生の先夜の言葉を今更いまのように怪しゆう思つて、彼は途々みちみちこの一言いちごんを胸むねに幾度いくたびか繰返した、そして一念端はしな

くもその夜の先生の怒罵どばに触れると急に足が縮むすくよう思った。

然し「呼びに来た」のである。不思議の力ありて彼を前より招き後あとより推おし忽ちたちま彼を走らしめつ、彼は躊躇ためらうことなく門を入った。

居間に通つて見ると、村長が来ている。先生は床に起直つて布団ふとんに倚掛よっかかつて居る。梅子も座に着いている、一見一座の光景ようすが平常ふだんと違つて居る。真面目で、沈んで、のみならず何処どこかに悲哀の色が動いている。

校長は慇懃いんぎんに一座に礼をして、さてあらためて富岡老人に向い、

「御病気は如何いかがで御座いますか」

「どうも今度の病気は爽快はつきりせん」という声さえ衰えて沈んで居る。

「御大事ごだいじになされませんと……」

「イヤ私も最早もう今度はお暇いとま乞いじやろう」

「そんなことは！」と細川は慰さめる積りで微笑えみを含んだ。しかし老人は真面目で「私も自分の死期の解らぬまでには老耄もうろくせん、とても長くはあるまいと思う、其処そこで実は少し折入おまつて貴公おまえと相談さうだんしたいことがあるのじや」

かくてその夜は十時頃まで富岡老人の居間は折々談はなし声こゑが聞え折々寂しんと静まり。又折

々老人の咳せきばらいが聞えた。

その翌日村長は長文の手紙を東京なる高山法学士の許もとに送った、その文の意味は次ぎの如くである、――

御申越おんもうしこし以来一度も書面を出さなかつたのは、富岡老人に一条を話すべき機会おりが無かつたからである。

先日の御手紙には富岡先生と富岡氏しとの二個ふたりの人がこの老人の心中に戦かつておるとのお言葉が有つた、実にその通りで拙者も左様思つていた、然るにちようど御手紙を頂いた時分以来は、所謂いわゆる富岡先生の暴力益ますます々つものり、二六時中富岡氏の顔かおだし出する時は全く無かつたと言つて宜よろしい位、恐らく夢の中うちにも富岡先生は荒れ廻つていただろうと思われ
る。

これには理由わけがあるので、この秋の初に富岡老人の突然上京せられたるのは全く梅子嬢さんを貴所あなたに貰わす目算であつたらしい、拙者はそう鑑定している、ところが富岡先生には「東京」が何より禁物なので、東京にゆけば是非、江藤侯井下伯その他故郷くにの先輩の堂々たる有様を見聞せぬわけにはいかぬ、富岡先生に取つてはこれ則ち不平すなわ、頑固がんこ、偏屈へんくつの源げ因んであるから、忽たちまち青筋を立てて了つて、的あてにしていた貴所あなたの挙動ふるまいすらも疳癩かんしゃくの

種となり、遂に自分で立てた目的を自分で打壊して帰国つて了われたものと拙者は信ずる、然るに帰国つて考えてみると梅子嬢の為に老人の描いていた希望は殆んど空になつて了つた。先生何が何やら解らなくなつて了つた。其所で疝は益々起る、自暴にはなる、酒量は急に増す、氣は益々狂う、真に言うも氣の毒な浅ましい有様となられたのである、と拙者は信ずる。

現に拙者が貴所の希望に就き先生を訪うた日などは、先生の梅子嬢を罵る大声が門の外まで聞えた位で、拙者は機会悪しと見、直に引返えしたが、倉蔵の話に依ればその頃先生はあの秘蔵子なるあの温順なる梅子嬢をすら頭ごなしに叱飛ばしていたとのことである、以て先生の様子を想像したまわば貴所も意外の感あることと思う。

拙者ばかりでなくこういう風であるから無論富岡を訪ねる者は滅多になかった、ただ一人、御存知の細川繁氏のみは殆ど毎晩のように訪ねて怒鳴られながらも慰めていたらしい。然るに昨夕のこと富岡老人近頃病床にある由を聞いたから見舞に出かけた、もし機会が可かつたら貴所的一条を持出す積りで、老人はなるほど床に就いていたが、意外なのは暫時く会ぬ中に全然元氣が衰えたことである、元氣が衰えたと云うよりか殆ど我が折れて了つて貴所の所謂富岡氏、極く世間並の物の能く通曉た老人に為つて了つたことである、

更に意外なのは拙者の訪問をひどく喜こんで実は招よびにやろうかと思つていたところだとのことである。それから段々話しているうちに老人は死後のことに就き色々拙者に依いた托たくせられた、その様子が死期の遠からぬを知つておらるるようで拙者も思わず涙を呑のんだ位であつた、其そこ処こで貴所の一条を持出すに又とない機おりりと既いに口を切ろうとすると、意外も意外、老人の方から梅子嬢さんのことを言い出した。それはこうで、娘は細川繁に配する積りである、細川からも望まれている、私わし初はは進まなかつたが考えてみると娘の為め細川の為め至極良縁だと思ふ、何卒どうか貴所あなたその媒酌者なごうどになつてくれまいかとの言葉。胸に例の一条が在る拙者は言句ごんくに塞つまつて了つた、然し直ぐ思い返してこの依頼を快く承諾した。

と云うのは、貴所に対して済ぬようだが、細川が先に申込み老人が既に承知した上は、最早もはや貴所の希望は破れたのである、拙者とても致し方がない。更に深く考えてみると、この縁は貴所の申込が好し先であつてもそれは成就せず矢張、細川繁の成功に終わるようになっていたのである、と拙者は信ずるその理由は一に貴所の推測に任かす、富岡先生を十分に知つている貴所には直ぐ解るであらう。

かつ拙者は貴所の希望の成就を欲する如く細川の熱望の達することを願う、これに就き少も偏頗へんぱな情こころを持っていない。貴所といえども既に細川の希望が達したと決定きまれば細川の為

めに喜ばれるであろう。又梅子嬢さんの為にも、喜ばれるであろう。

そして拙者わづらひの見たところでは梅子嬢さんもまた細川に嫁かすることを喜こんでいるようである。これが良縁りやうゑんでなくてどうしよう。

拙者わづらひが媒酌者なこうどを承諾するや直ぐ細川を呼びにやった、細川は直ぐ来た、其処そこで梅子嬢さんも一座し四人同席の上、老先生からあらためて細川に向い梅子嬢さんを許すことを語られ又梅子嬢さんの口から、父の処置に就いては少しも異議なく喜んで細川氏に嫁すべきを誓い、婚礼の日ひは老先生の言うがままままにきたる来十月二十日と定めた。鬪くしは遂にのこりもの残者に落ちた。貴所きよからも無論老先生及細川に向て祝詞を送らるることと信ずる。

六

婚礼も目出度めでたく済んだ。田舎いなかは秋晴拭ぬぐうが如く、校長細川繁の庭では姉様冠あねさまかぶりの花嫁中腰ちゆうこになつて張物はりものをしている。

さて富岡先生は十一月の末終ついにこの世を辞して何国なにくには名物男一人を失なつた。東京の大新聞二三種に黒梓くろわく二十行ばかりの大きな広告が出て門人高山文輔、親戚しんせき細川繁、友

人野上子爵等の名がずらり並んだ。

同国の者はこの広告を見て「先生到頭死んだか」と直ぐ點頭うなずいたが新聞を見る多数は、何人なればかくも大きな広告を出すのかと怪むものもあり、全く気のつかぬ者もあり。

然しこの広告が富岡先生のこの世に放った最後のいっかつ一喝で不平満腹の先生がせめてもの遣悶こころやりを知人ちしんに由よつて洩もらされたのである。心ある同国人の二三はこれを見て泣いた。

青空文庫情報

底本：「牛肉と馬鈴薯」新潮文庫、新潮社

1970（昭和45年）年5月30日初版発行

1983（昭和58年）年7月30日22刷

入力：Nana Ohbe

校正：門田裕志、小林繁雄

2004年6月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

富岡先生

国木田独歩

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>